The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	男性性を理解する分析概念の探求 ： ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に
Author(s)	尾﨑, 俊也
Citation	未来共生学. 2018, 5, p. 225-244
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/68215
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

男性性を理解する分析概念の探求
ヘゲモニックな男性性とサラリーマン研究を事例に

尾﨑 俊也
大阪大学大学院人間科学研究科博士後期課程

要旨

本稿は、男性学の文脈から、男性性を理解する分析概念を追究したものである。男性学において、最も言及されてきたのが、コンネルのヘゲモニックな男性性概念である。ヘゲモニックな男性性は、男性の女性に対する支配をつくり、再生産する男性性の形態である。日本の戦後社会においてヘゲモニックな男性性は、とくにサラリーマン的な男性性と結びつけられてきた。本稿は、ヘゲモニックな男性性概念を概観するとともに、戦後のサラリーマンと男性性の研究を検討した。その上で、戦後のサラリーマンをヘゲモニックな男性性として分析することの有効性と問題点を明らかにした。

最終的に本稿は、ヘゲモニックな男性性をより豊かに活用するための方法として、メッサーシュミットの支配的な男性性概念を複合的に用いることを提示した。加えて、ヘゲモニックな男性性概念のような覇権性や権力性との関連で男性性を理解する方法のみならず、弱さや脆さの視点から男性性を理解する可能性を示した。

目次

はじめに
1. 目的——ヘゲモニックな男性性としてのサラリーマン研究のその先へ
2. 概念と方法
2.1 男性性概念
2.2 ヘゲモニックな男性性
2.3 男性性を理解する視点——状況、時代、方向性
3. 分析——ヘゲモニックな男性性の捉え方
3.1 戦後サラリーマン的ヘゲモニックな男性性研究の有効性と問題点
3.2 サラリーマン男性の規範モデル
3.3 ヘゲモニックな男性性議論からの転換
4. 考察——男性ヘゲモニーの理解を深化する視点
4.1 メッサーシュミットの男性性概念とその適応
4.2 脆いものとしての男性性——男性性を弱さから思考する
おわりに

キーワード

ヘゲモニックな男性性
サラリーマン
男性学

はじめに

研究を推し進めるにあたって、分析概念は不可欠な道具である。現実の社会に存在するさまざまな現象の特性を捉え、理解するために社会学的な概念措定は、研究の目的、内容や方法などその全般にわたって大きな意味をもつ。研究の目標となる問いに、この概念は適当なのかどうか。この概念を用いることによって内容や方向、結論の導き出し方にどのような違いやユニークさがうまれるのか。現象と概念の組み合わせに妥当性はあるのか。このような概念をめぐる問いは際限なく広がっていく。以上を踏まえて本稿では、筆者が研究関心とする男性学・男性性研究の分野における概念の用い方について探求し、その研磨を通じて、当分野の発展に貢献することを目指す。

1. 目的――ヘゲモニックな男性性としてのサラリーマン研究のその先へ

1980年代後半以降、社会運動体としていわゆる男性運動が大阪を中心に始まり、男性相談や男性の脱暴力プログラムなど、男性というジェンダーにフォーカスした取り組みが行われてきた。そして、そうした社会運動とともに、男性をジェンダー化された存在として把握し、サラリーマン生活、教育、建築、逸脱、犯罪、サブカルチャーなどのさまざまな視点から、男性を研究対象とする男性学の学問化が達成され、男性学を名乗る研究もみられるようになってきた。

本稿は男性学の潮流のなかで、「ヘゲモニックな男性性」概念を事例に、どのように男性性（男らしさ）が扱われ、意味を与えられ議論されてきたのかを考察したい。男性性研究の潮流においてヘゲモニックな男性性概念は、中心であり続けてきた。これは、オーストラリアの社会学者であり、男性学者でもあるコンネル（Connell）によって提唱され、さまざまな量的研究、質的研究において用いられてきた概念である。以下では、はじめにコンネルの定義を概観し、それがどのように日本の文脈で用いられてきたのかを考察する。その上で、ヘゲモニックな男性性概念をめぐる男性学的研究の可能性と問題点を提示し、男性性研究・男性学の未来を展望する。

具体的な手続きとして、第2節でヘゲモニックな男性性概念を社会学的な角度から概観し、周辺に布置された概念群とともに整理する。その上で、第3節では複数の男性性研究の事例を分析しながらこの概念がどのような問題設定の下に用いられ、どのような方向性に基づいて援用されてきたのかを明らかにする。ヘゲモニックな男性性を用いた研究の多くは、経済社会における優位者としての男性の姿をその典型例としてきた。日本的文脈では、男性サラリーマンが取り上げられる傾向にあり、サラリーマンとヘゲモニックな男性性に関する研究には蓄積がある。近年それらの研究に対して建設的な批判が、川口（2014）と細谷（2016）によってなされてきた。両者の議論を参照し、今後の男性性研究に向けて新しい視点の可能性を検討する。第4節は、強さを前提とした男性性から、男性性を弱さや脆弱さから捉えなおすことや、男性性研究でほとんど行われてこなかった非都市圏の男性性をテーマとすることの必要性について記述する。

2. 概念と方法

2.1 男性性概念

本節では、本稿で用いる概念について整理する。原則的に本稿でいう男性性は、男性の理想とされるあり方のことを指すものとする。態度、振る舞い、様態、行動などにおいて、脱ジェンダー化された人間的特性ではなく、女性性との対応関係のなかで、男性ジェンダーの特性として、一般的に評価を受け得るものとして男性性を設定する。なお、「男性性」という語と「男らしさ」という語は区別して用いる。多賀（2006: 19）は、「男性性は、日本語の『男らしさ』と重なる部分もあるが全く同じではない。まず、『男らしさ』が日常会話でも普通に用いられるのに対して、男性性（masculinity）の方は、通常は専門用語として研究者のみが用いる分析概念である」と説明する。本稿もこれを踏襲する。その上で本稿では、男らしさという語についても 日常的に使用されている場面を想定して用いる。

本稿で最も重要な概念として扱うのは、「ヘゲモニックな男性性」である。原語はhegemonic masculinityだが、日本語で使用する場合、「ヘゲモニックな男性性」と「覇権的な男性性」と表記するパターンに分かれる[1]。本稿では、日本語

の「覇権」という語ではなく、カタカナ表記の「ヘゲモニー」という語を用いる。この概念が、アントニオ・グラムシ以来の社会科学的な権力論を踏まえたものであることを重視したいためである。

ヘゲモニックな男性性を用いた研究は、数多くある（多賀 2006, 2016; 多賀編 2011; 知念 2013, 2017; 片田孫 2001, 2014; 田中 2009など）。加えて、多用されてきたヘゲモニックな男性性概念を事例に、男性性の方法論的研究も行われている（川口 2014; 細谷2016）。川口は、とくに経験的研究においてコンネルの男性性理論を用いることの長所と限界について指摘し、その限界を乗りこえるための方法論を提示した。また、細谷（2016）は、戦後日本社会においてサラリーマンは、ヘゲモニックな男性性を代表していたのかという観点から検討を加えている。川口と細谷の研究については、第3節において記述する。

2.2　ヘゲモニックな男性性

ヘゲモニックな男性性は、男性学・男性性研究の分野においてさまざまな研究に用いられてきた基礎概念である。ここでは、はじめにその基本的な定義について確認したい。

ヘゲモニックな男性性は、「他の形態の男性性よりも文化的に賛美される男性性の形態のひとつ」であり、「家父長制の正当性問題に対して今日的に受け入れられる応答を具現化したジェンダー実践の編成として定義されうる。それは、男性の優位な立場と女性の従属性を保証すると考えられる」ものである（Connell [1995] 2005: 77）。ヘゲモニックな男性性は、ほかの男性性・女性性に対する優位な位置を占め、現代的な男性支配（家父長制）の正当性を担保するものである。家父長制の正当性問題に対して今日的に受け入れられる応答を具現化したジェンダー実践というのは、たとえば、稼得役割を一手に引き受けるようなホワイトカラー男性の労働実践といえよう。この種の男性はもちろん少なくない。ただ第3節以降にみるようにすべての男性がヘゲモニックな男性性を志向しているといい切ることはできない。ホワイトカラー労働に従事する男性のなかで、大きな稼得役割を担うことを志向しない男性や、妻と対等に家事責任を担いたいと考える男性も存在している。

ヘゲモニックな男性性を中心とするコンネルが構築した概念群は、とくに男性支配のジェンダー秩序を説明する際に用いられ得る。男性支配のジェンダー秩序は、ヘゲモニックな男性性だけでは成り立ちえない。ヘゲモニックな男性性の存在を確かなものにする男性性・女性性の諸関係があって形成されているのである。男性性は、「複数性としての男性性（masculinities）」と理解されてきた（Connell [1995]2005）。これは複数存在する男性性の間の多様性と階層性を発見するとともに、一枚岩的に男性支配がつくられているのではなく男性性の間の階層構造で優位に立つヘゲモニックな男性性が、さまざまな男性性とのせめぎ合いや補完関係から、女性に対する支配を形成するという理解に役立った。

ここではさらに、そのヘゲモニックな男性性とほかの男性性・女性性との関係について、重要な概念を三つ挙げておくことにしたい。

まず、「共犯的な男性性（complicit masculinity）」である。共犯的な男性性は、ヘゲモニックな男性性を体現しない（できない）が、ヘゲモニックな男性性と共犯関係をもち、ヘゲモニックな男性性から利益を得る画策をする男性性である。ヘゲモニックな男性性に適う男性は少ない。しかし、現実には多くの男性が女性を従属化する男性支配社会から利益を得ている。

続いて、「従属的な男性性（subordinated masculinity）」は、ヘゲモニックな男性性に対して逸脱し、従属的位置に置かれた男性性である（Connell 1987: 78）。従属的な男性性は、男らしくない、つまり、女性的とみなされる男性性である。近代的な異性愛規範に貫かれた今日的な社会では、同性愛男性が従属的な男性性の典型的な例とされる。

最後に、「周縁的な男性性（marginalized masculinity）」という概念も定式化されている。これは、エスニシティや人種などの要素との関連において周縁化された男性性を指している。白人優位な社会における黒人男性の男性性などがこれに当たると考えられる。

2.3　男性性を理解する視点——状況、時代、方向性

ヘゲモニックな男性性は、特定の様態や特性、傾向性と結びつけられているものではない。汎用的に使用されるための概念装置であって、たとえばサラリーマン的な男性性＝ヘゲモニックな男性性とか、暴力的な男性性／豪胆で鷹揚な男性性＝ヘゲモニックな男性性などと実態的な結びつきを指すものではない。

ヘゲモニーと結びついた男性性のパターンは社会によって異なる。男性のヘゲモニーは、多くの男性と女性の社会的支持によって成り立つ。その支持も流動的なものであり、いつ別の男性性に取って代わられるかは分からない。ここに男性性を研究する者が行わなければならない作業がある。何がヘゲモニックな男性性に当たるのか適切な判断がなければならない[2]。

男性性を見出す作業は、多岐にわたる。個人の人格としての男性性、社会的言説としての男性性、規範としての男性性、さらには場面としても社会構造としての男性性、相互行為における男性性、メディア空間における男性性、組織・集団における男性性、表象における男性性なども想定できるほど、男性性を捉える視角の可能性は際限なく存在する。コンネルとメッサーシュミット（Connell and Messerschmidt 2005）は、さまざまに用いられてきた男性性概念を概観しながら、マクロな社会構造のレベルからミクロな相互行為のレベルにいたるまで、広く男性性を分析する可能性を提示している。コンネルとメッサーシュミットの捉え方の共通する特徴は、対象とする状況を、ローカル、リージョナル、グローバルの三つの領域に沿って区分けしていることである。とくにメッサーシュミットは、経験的研究において、国際政治の文脈から日常会話など諸個人間の対面的場面まで幅広く男性性を観察している（Messerschmidt 2016）。場面を意識しながら男性性を観察する意義は、ある場面における男性性が他の場面で力をもちうるのかを分析し、男性性の階層秩序をみることを通じて、いかなる男性性が社会のなかで優位性をもっているかを見出すことにある。

社会や集団によって男性性は異なる。それぞれの社会でその都度、研究者が男性性類型に当てはまる形式の男性性を抽出することが求められている。第3節1項以降のサラリーマンの事例で述べるように、特定の時代と状況を念頭に、ヘゲモニーを有する男性性とはいかなるものなのか、また、それに対してどういった男性性が従属化されているのか見定める必要がある。後期近代といわれる今日の社会状況では、男性を取り巻く環境は流動的に変化し続けている。多賀（2001）は後期近代社会の男性性をめぐる変容を、とくに複数の男性性が共存し価値が多様化している様相を指して「多元的変動社会」と名づけている。そのような社会状況において、個人と個人の対面的な相互作用というローカルなレベルにみられる男性性が、全体社会にどのように影響しているのかを観察することが大切である。

男性支配の正当性を担保する男性性のあり方も変化している。戦時では銃後の妻をあとに戦地に赴くことが、戦後高度成長期には、企業戦士として滅私奉公し、庭付きの一軒家をかまえる、すなわち、サラリーマンとして成功することが男性のヘゲモニーを貫く男性性を実践することを意味した。近代以前や近代化の過程では、農家の家父長を演じることがそれに該当していたかもしれない。近代以降の今日では従属化されている男性の姿として「ゲイ男性」や「クィア」といわれる男性があげられる。ただし、近代以前にはある種の同性愛的な男性性は、従属化の対象とはされていなかった。このように、今日われわれが「男らしい」と眼差しを向ける男性の特性は、時代性を伴ったものであると理解できる。

3. 分析――ヘゲモニックな男性性の捉え方

3.1 戦後サラリーマン的ヘゲモニックな男性性研究の有効性と問題点

先に指摘したように、戦後の日本社会におけるヘゲモニックな男性性には、「サラリーマン的男性性」が例として挙げられてきた（多賀編 2011; 田中 2009）[3]。たとえば、田中（2009: 157-158）は、「〈ヘゲモニックな男性性〉とは、決して力強さや頭脳の明晰さによって特徴づけられるものではなく、いささか平凡にも思えるが、『フルタイム労働に従事しながら妻子を養う男性像』だと結論づけられ、「現代の日本社会での〈ヘゲモニックな男性性〉が覇権的という語感からは連想しにくい形態をとっていたとしても、それは女性を家庭や地域へと押し込む権力として作用している」と分析する。そもそも男性学・男性運動の初期には、会社人間として生きてきた男性の、男性性からの解放といったテーマが目立った（伊藤 1996）。このことから、企業で働くことと男性性の結びつきが盛んに取り扱われてきたといえる[4]。

サラリーマンが戦後社会において、量的に多数派で男性が歩むと自明視されたライフコースであったわけではない。サラリーマンといわれるホワイトカラー層は、戦後一貫して増え続けているが、量的な意味で多数派であるとはいえない。なぜサラリーマンがヘゲモニックな男性性の尺度に当てはまるのかと

いうと、そこに男性の制度的特権から利益を享受し、そのほかの従属的な男性性／女性性を抑圧する男性支配の形態がみられるからである。要するに、サラリーマンがヘゲモニックな男性性として議論されるのは、ジェンダー秩序における質的な影響力が大きいからである。サラリーマンは男性が生きるべき規範的モデルの側面を有していた上、そこには、さまざまな制度的社会的な利益が付随していた。

21世紀のポスト戦後社会といわれる今日では、しばしばジェンダーやセクシュアリティに関する意識が変容し、そのなかで、男性の稼得役割期待は、弱まってきているといわれる。しかし、いくら意識の面で変化が生じても、男性がサラリーマンであることによって受ける制度的利益には変わりがない。1985年以前には男女雇用機会均等法がなく、女性に対する職業上の抑圧と制約が厳しく、また、同法成立後も一般職／総合職という採用区分によって実質的な差別が続いている。男性にはジェンダーに基づく採用、昇進などにおける制約がなく、キャリア上昇に邁進できる。婚姻関係を結び、「妻帯者」となると、今日の社会保障制度では、妻子を養っているという理由で夫に扶養手当が支払われ、いわゆる専業主婦・パート労働の妻への税と保険の控除が発生する。そしてなにより仕事を中心に生活を組み立てることができるように、妻が家事・育児労働の大部分を担ってくれる。妻が夫と同じように賃金労働に従事している場合では、平等にキャリア上昇を追求しながら、家事・育児労働を分担することを考えられてよいだろう。しかしながら、ホックシールドら（Hochschild and Machung 1989=1990）が概念化した賃金労働と育児・家事労働の二重負担（dual burden）が妻だけに社会的抑圧として存在している。女性には、賃金労働（第一の勤務）だけではなく、家事労働と育児労働などの第二の勤務があり、家庭の外でも内でも労働に従事しているのが実態なのである。働きすぎといわれる日本の男性より、日本の女性は働いているといえる。

さらに、夫は、妻に対して圧倒的な経済的優位性をもち、世帯主や筆頭者という立場も社会的に用意されている。そのため、単身女性は、銀行でローンを組むことが難しい反面、世帯主であり稼ぎ頭である男性は、より簡単にローンを組むことができたりもする。稼ぎ頭として社会的に認識されることで、物事を自由に円滑に進める利益を得ることができるほか、家族成員に対する関係性においても力をもつことになる。このように、サラリーマンとして婚姻関係を結ぶことに由来する「男性稼ぎ手モデル」に依拠する社会制度的な利益は膨大であり、そのことは社会構造に内在する男性優位の論理に基づいていると同時に、またそのことが、その論理を再生産・強化しているのである。

近年では、サラリーマンといわれる企業労働者間においても、多様化が進んでいる。企業や役所に勤務するホワイトカラー層の内部の分断も正規、非正規の形をつくり進んでいるほか、専門性や裁量権がない単純な事務仕事も増えた。機械化が進むと、単純労働となった業務は、女性と一部の男性によって担われる。男性が稼得役割を担う可能性は狭まり、ヘゲモニックな男性性と男性サラリーマンの関係は揺らいでいる。稼得役割を担うサラリーマンの形態や意識が、揺らいできたことも指摘されている（多賀編 2011）。これらを踏まえれば、男性にとって定年まで勤めあげるサラリーマンとしてのライフコースがかつてほど自明ではなくなり、より相対化されてきたということができるだろう。

3.2　サラリーマン男性の規範モデル

ところで、非正規雇用の形態で労働に従事することが、メンタルヘルスにどのように影響するのか、さらに、そこに男女差があるのかを研究した片瀬（2017）は、男性が非正規雇用であることは、女性がそうである場合以上に抑うつを高めていることを実証的に明らかにした。非正規雇用の男性は、「男性稼ぎ手モデル」から逸脱しており、「フリーター」という負のカテゴリーの作用もあり、スティグマ化されやすく、ヘゲモニックな男性性に対して従属的な男性性の位置を占めることになるという（片瀬 2017: 11）。このように正規雇用に就けないことが、男性にとって女性とは質的に異なる経験をつくりだしており、ヘゲモニックな男性性を体現できず、従属的な男性性の位置を占めることが、メンタルヘルスに支障をきたす傾向性を高めているということである。正規雇用から逸脱することが精神に負の作用ももたらすほど、今日でも「男性稼ぎ手モデル」が規範的モデルとして社会的にある程度の影響力をもっているのではないか、という見方が成り立つ。

換言すると、戦後サラリーマン的なヘゲモニックな男性性は、若年層の男性にとって実現可能性が減じているがために、かえって求心力が強まっていると

いえるのではないだろうか。実現することがかつてより難しくなっているために、むしろ希少価値が増しているともいえる。相対的にヘゲモニックな男性性を体現できる男性が少なくなっているために、このモデルに到達することは若い男性間のヘゲモニー争いにおいて、「ひとり抜ける」ことを意味し、より多くの男性、女性に対する優位性を摑むことになる。さらに、一度手にしたこの椅子に座り続けて得られる特権が多いために、このヘゲモニックな男性性の地位から降りることによる逸失利益は、相対的に膨れ上がっている。以上からは、戦後サラリーマン的な男性性が、時代に伴ってどのように変化してきたのか、時系列的に明らかにしていくことは重要な研究課題であるといえる。

だが、戦後的な男性性規範が残っている側面と、逆に弱まっている部分もある。前項で既述したように、男性の稼ぎ手モデルは、高度成長の過程で制度的に確立された。教育やメディアにおいても、「いい学校、いい会社」に入り、妻と子どもを養うことが、男性の理想的ライフコースとして支持されてきた。引き続き「男性稼ぎ手モデル」が規範的モデルとしての影響力をもっているとしても、男性稼ぎ手モデルを多くの男性が理想として合意しているという前提は、確固たるものではない（多賀編 2011）。雇用形態が流動化し、稼ぎ手ではないホワイトカラー層も増加しており、かつてのような規範性は弱まってきている。また、先の精神に支障をきたす場合も、それがヘゲモニックな男性性を内面化しながらも、体現できないために経験する苦悩といえるのか、そもそも経済的理由から抑うつ感を強めているのかどうかを峻別することはできない。時代の変化を通じて、サラリーマン的男性性の規範を成り立たせる合意と支持は、磐石なものではなくなった。

繰り返しになるが、コンネルはヘゲモニックな男性性が、そのほかの男性性、女性性からの合意によって成り立つとしている（Connell 1987）。川口もコンネルの理論をひも解きながら、グラムシ由来の「ヘゲモニー概念の含意を踏まえるならば、コンネルにとってヘゲモニックな男性性概念は、男性による女性支配的な実践一般を指すのではなく、男らしさの理想や常識として人々から支持されることによって、既存のジェンダー秩序を正当化するような男性性を指していると考えられる」（川口 2011: 113-114）と説明している。しかしながら、川口は「どのレベルまで人々が支持や同意をしていればそれをヘゲモニックであるといえるのか、その基準がはっきりしない」ことに加えて、「何らかの男性性をヘゲモニックであると判断するには、コンネルがそうしたように人々の同意や支持などを後景に追いやり、経済的な構造など客観的に把握しやすいものをその基準として召喚するしかない」として、ヘゲモニックな男性性の概念自体が含む問題点についても指摘している（川口 2014: 70）[5]。さらに川口は、戦後的日本のサラリーマンを条件づけた性別役割分業に関する意識の賛否が拮抗し、かつ育児をする男性の姿勢がもてはやされている現状を挙げて、「仮に賛否それぞれをサラリーマン的男性性と家事・育児する男性像とに結びつけて考えた場合、どちらがより多く人びとの支持を集めていると言えるだろうか」と疑問を呈する（川口 2014: 70）。すなわち、男性性研究において、サラリーマン的男性性は、ヘゲモニックな男性性の形態とみられてきたが、必ずしもサラリーマン的男性性が全面的に支持を得ていない現状を鑑みて、多くの人々の支持を条件とするヘゲモニックな男性性にサラリーマン的男性性を当てはめることの不適切さを指摘している。

3.3　ヘゲモニックな男性性議論からの転換

さらに精緻に議論を進めるならば、男性サラリーマンに関するテーマは男性性の議論なのか、「男性であること」の議論なのかに注意する必要がある。この観点については、細谷（2016）の研究を参照して論を進めたい。細谷は、戦後の漫画やエッセイ、映画、スポーツにおいて表象されるおける理想の男らしさを分析して、それとサラリーマン的な男性性との差異を明らかにしている。

細谷（2016: 281）は、前提としてサラリーマンがもつ社会的威信や優位性については認めている。サラリーマンは、戦後社会の標準的な行動様式・生活様式をつくりだすとともに、社会的威信や規範に影響を及ぼしたと論じる。ライフコースとしても「上昇志向の高校生男子は、官庁や大企業への就職率の高い大学や学部への進学を目指した。また、サラリーマンたちは、多くの女性たちにとって望ましき結婚相手となっていた」状況を形成するほど、サラリーマンが目指されるべき理想となってきたことを指摘している。ただその一方で、「多くの人が挙げる男らしさイメージの典型像は、高倉健の演じるところの不器用で寡黙なアウトローないしは周縁的な男たちの振る舞い方や身の処し方に表象

されており」、そのほかスポーツのヒーローたち、時代劇や映画、少年漫画などにみられる闘う男たちのイメージは、「サラリーマン的生き方の対極に位置する」と解説する（細谷 2016: 287）。

その上で、「『覇権的男性性』なるものは、『男であること』の特定タイプ（＝或（あ）るタイプの男たちのあり方）であるのか、それとも『男らしさ』という理想における特定のタイプであるのか、という問題」を提示する（細谷2016: 282）[6]。細谷が論じるように、戦後のサラリーマンのあり様が、男であることのみならず、男らしさと結びつきながら男性ヘゲモニーを体現していたかどうか、すなわち、サラリーマンがヘゲモニックな男性性を体現していたのか、サラリーマンが男性のヘゲモニーを握っていたのかは判断できない部分がある。男性サラリーマンが特権を受けていることは間違いがない。だが、それは男性性ではなく、男性であることに由来するのではないだろうか。細谷（2016: 293）は結論部分で、「現実の男たちによる政治的企図・活動とその成功した産物（社会的な諸権力・諸威信の保有）」を覇権と捉え、「そうした男たちが体現する覇権的男性性と、理想の男らしさとを区別することで、両者の間にある緊張やさらに他の男たちの男性性との間に生じるダイナミズムを考察していくことが可能となるのではなかろうか」とコンネルと異なる覇権の捉え方を提起する。コンネルのいうヘゲモニック男性性の理想性という部分と実態としての男性の覇権性は、必ずしも一致しない。理想的な男らしさだと支持を集めることは、男性の覇権性を根拠付けることと直接的な結びつきはない。戦後サラリーマン的な男性性のあり方は、「基本的には現実の社会的諸権力・諸威信を獲得してきたことによって覇権的であると言えた」のである（細谷 2016: 293）。

以上、ここまでにみてきた川口や細谷の見解から、サラリーマンとヘゲモニックな男性性を結びつけて議論することの難しさが明らかになった。ただ、留意しなければならないのは、ヘゲモニックな男性性をサラリーマンに適用することに対して批判を展開した川口自身が認めるように、「ある男性性への否定的評価が存在すること自体はそのヘゲモニーを否定することには必ずしもつながらない」ことである（川口 2014: 70）。現状のサラリーマン的生活世界においては、男性サラリーマン自身とそれを取り巻く社会もヘゲモニックな男性性の正当性を与えておらず、サラリーマンの主観的意味世界からはジェンダー・ヘゲモニーは実感されないが、それとは裏腹にサラリーマンは実際には社会的なヘゲモニーを有している、というのが実態ではないだろうか。つまり、ヘゲモニックな男性性概念に依拠するのではなく、サラリーマンのヘゲモニー闘争へ視点を転換した上で研究が進められるべきではないだろうか（川口 2014: 72-75）。川口は、結果としてのヘゲモニックな男性性ではなく、男性ヘゲモニー闘争のプロセスに注視することで、流動性を増す後期近代社会の男性性を捉えようとする。「男性性間のヘゲモニー闘争のプロセスに関心を向けるということは、様々な実践のパターンが『男性』というジェンダー・カテゴリーと結びつけられ、そして女性を含む人びとから意味づけられていくプロセスを分析することを」指している（川口 2014: 72）。この指摘を受け筆者は、第4節1項にて、メッサーシュミットの支配的な男性性概念とヘゲモニックな男性性の併用によって男性の女性に対する支配をつくりだす社会過程を分析する方法を議論する。

以上から、第一に、社会的理想としての男性性と実態としての女性に対する支配・男性の覇権性を切り離して理解すること、第二に、流動的状況を前提に男性のヘゲモニーを生成、再生産する社会過程への着目が重要であると分かった。

4. 考察――男性ヘゲモニーの理解を深化する視点

4.1 メッサーシュミットの男性性概念とその適応

本稿だけではなく多くの研究が、どういった男性性がヘゲモニックな男性性なのか、それに適応する形式の男性性について検討してきた。しかしながら、それに対していえるのは、何がヘゲモニックな男性性として適当かどうかという議論を進めることに拘るのではなく[7]、それよりもむしろ、男性のヘゲモニーに着目しつつ、男性と男性性の関係を適当に捉えるための方法論を模索することがジェンダー研究に資するはずだ、ということである。前節で概観した川口（2014）の研究によれば、ヘゲモニックな男性性の可能性と限界を把握した上で採用すべき方法は、ヘゲモニックな男性性から男性間のヘゲモニー闘争へと視点を転換する方法であった。筆者は、そのヘゲモニー闘争を捉えるために、メッサーシュミットの支配的男性性／女性性の概念を提示したいと考える。

ヘゲモニックな男性性とそれを支える男性性の理論は、社会全体を射程に入れ、優位性をもつ男性性を捉えるのに、非常に適した概念であった。しかし、日常的な生活世界における相互作用で優位性をもつ男性性を取り出して分析する場合には、メッサーシュミットの「支配的な男性性概念（dominant masculinity）」が効果的である。支配的な男性性は、特定の社会的文脈で受け入れられ、共有され、最も賛美される男性性の形態のことをいう（Messerschmidt 2012: 38）。さらに、メッサーシュミットは、支配的な女性性についても概念化しており、これも支配的な男性性と同様の意味で用いられている。コンネルにおいては、今日の社会が男性支配社会であるため、ヘゲモニックな女性性は概念化されていなかった。コンネルのヘゲモニックな男性性概念とメッサーシュミットの男性性概念を組み合わせて考えてみると、対面的な相互作用などミクロな場面では支配的な男性性と女性性はどちらも想定され得るが、俯瞰的な視点で社会構造に目を向けると、ヘゲモニックな男性性が優位な立場として浮上する。個人間で言葉を交わす対面的な相互作用の場面では、特定の女性性がその場を支配することがあっても、全体社会では男性支配が通底していることが分かる。

これらの概念群から、たとえば、ある男性が、女性が多数派を占め女性性で貫かれている状況を経験し、「実際には女性のほうが優位性をもっていて男性は虐げられている」と訴えるような事態も説明できる。特定の男性が生きる主観的世界からは、女性の優位性が際立って経験されることもあろう。ただし彼は、目の前で経験する個別の支配的な女性性を極大化し、各々の主観的世界を超えて存在する男性支配の客観的な社会構造には気づいていない。他方で、「とくに差別を受けたことはない」[8]と感じる女性は、日常的実践における支配的な女性性の経験から、ヘゲモニックな男性性の存在をみていなかったり、蓋をしていたりするかもしれない。

支配的な男性性は、ヘゲモニックな男性性と関係がないわけではない。社会構造からくる権力性は、対面的な相互作用の場面にも影響することもある。ただ、支配的な男性性が常に男性のヘゲモニーと結合しており、男性支配が社会全体にあまねく広がっているわけではない。むしろ、ある場面では女性性の優位性が表れたり、従属的な男性性の状況が散見されたりするからこそ、実はそれらがヘゲモニックな男性性を支えている側面と、社会の基層に流れる男性支配が死角化されているのではないだろうか。

以上にみるように、コンネルの概念にメッサーシュミットの概念を組み合わせて検討することで、男性支配社会を再生産している流動的な社会過程を記述することができる。

4.2　脆いものとしての男性性——男性性を弱さから思考する

これまでの男性学的な研究は、ヘゲモニックな男性性を軸として、権威や権力性から男性性とそれを志向する男性を前景化していたといえる[9]。つまり強いものとしての男性性である。ヘゲモニックな男性性による研究は、サラリーマンをはじめとしていわゆる大卒高学歴・高階層男性の社会的世界を大きく取り上げがちであった。その半面で、従属的な男性性や周縁的な男性性には十分に着目してこなかった。従属的で周縁的な男性の諸相に言及するとしても、ヘゲモニックな男性性から零れ落ちる存在として取り扱われていたのである。川口（2008: 32）は、研究する側の生活世界での経験が特定の男性の諸相を一般化させ、また、ジェンダー研究が重視する当事者性の影響もあり、議論の俎上に挙げられる男性像が偏ったものになっていると指摘する。言い換えると、男性学の名の下に研究を行う者の経験が反映されているという指摘である。研究者の出身階層は高く、文化資本にも経済資本にも恵まれている傾向にある。男性性を分析する際に比較的階層が高いといえるサラリーマンが言及され、また事例として頻繁に用いられてきたのも、このことと関係がないわけではないだろう。

男性支配社会は、都市のホワイトカラー層の生活世界だけではなく、たとえば非都市圏においても顕著にみられる。ホワイトカラー労働が一般化する以前、近代化途上の社会に通底する男性の女性に対する支配性は、家父長制という概念で説明されていた。明治民法に父の優位性が記されるなど、男性の権力は制度的なものであり、財や土地を父系でつないでいくことが慣習化されていた。家長を頂点とし、家を中心とする職住一体の生活世界があった。だが、近代化の過程で従来の家制度は変容していき、非都市圏から都市圏への人口移動が急激に伸びた。では、都市化とホワイトカラー化によって、かつての農村地

域と家父長制は消え去ったのだろうか。そもそも現在では農村といえる地域も、ほとんど存在しないだろう。しかし、家父長制が消失したとはいえない。形を変えながら、男性支配は続いていると考えられる。なぜなら、たとえば「嫁不足」といわれる地域で、アジア出身の外国人女性を妻とし家系を維持したり生業を続けたりするような事例は、エスニックな階層性を交えながら男性支配を誇示しているものとして捉えられるからである。男性学の名の下で、非都市圏の男性性研究は十分に行われていない。ヘゲモニックな男性性概念を、このような地域で見出し分析することは、非都市圏の、あるいは非ホワイトカラー層の男性性研究の文脈に資すると考えられる。

権力性に特徴づけられた男性性を対象や分析の視点に組み込むことを前提とするのではなく、強さの裏返しとしての、壊れやすく弱い側面をもつ男性性から議論を始めることも考えられてもよいのではないだろうか[10]。たとえば筆者が行っている暴力研究の文脈に、弱さと男性性の観点を取り入れていくことを企図したい。例にしたいのは、カウフマン（Kaufman 1994）の両義性をもつ男性性の研究である。そこでは、従属的な男性性とヘゲモニックな男性性の上昇関係や下降関係といった単線的な図式ではなく、実態的にはその間に葛藤や苦悩がうごめいている様子が扱われている。ヘゲモニックな男性性はつねに誇示できるわけではなく、また、男性性を実践する資源は、どの男性にも豊富に所有されているわけではない。男性性と暴力の社会的関係を検討してみると、男性性資源の多寡が大きな問題になってくる。男性は、均等に男性性の資源から利益を受けるわけではない。それぞれの階層や威信に応じて、男性間で不均等に男性性資源が配分されている。そのため男性支配社会のなかで、特定の男性の立場が大きく男性性の資源を牛耳り、そのほかの男性は、男性性の理想や規範とは裏腹に資源に到達できず苦悩するというのが実態なのではないだろうか。たとえば、カウフマン（Kaufman 1994）は、男性の権力と支配は、それらのなさの裏返しなのではないかと指摘している。権力のなさこそが、権力を求める要因になっている[11]。その意味で、実態とは関係なくヘゲモニックな男性性を求めてしまう弱さへと視点を変えることも大切ではないだろうか。

おわりに

ヘゲモニックな男性性を追い求めることを前提とする議論だけでは、なかなか多様な男性性が溢れる社会を描写することは難しい。男性運動・男性学の黎明期に、伊藤（1993）や中河（1989）は、「男らしさの鎧」から降りることを提唱した。中河（1989）は、男らしさの鎧を、身体、表出と態度、地位と所有物、言語の4つのレベルに分けて議論した。たとえばそのなかで、男らしさの鎧を纏う身体について、「三島由紀夫のボディビルディングで鍛えた筋肉は、きわめて文化的な鎧であったということができる」と中河（1989: 12）はいった。伊藤（1993: 7）は、男らしさの鎧が、「『（他者に、何より女に対しては）絶対に優越していなければならない』『競争に勝たなければならない』『感情を表に出してはならない』ましてや『泣いてはいけない』という形で男たちを縛ってきた」と議論を展開した。そして、「古くさい〈男らしさ〉の鎧を、男たちは、今、それこそ文字通り〈男らしく〉(!?)脱ぎ捨てることが問われている」と主張してきた。そのように、男らしさの鎧が、社会運動の面でも学術においても取り上げられ、男性問題が浮上したのである。

今日では、男らしさの鎧を身に纏おうとする男性は少なくなったといえるだろう。三島由紀夫が体現するような男らしさは、メディアなどにおいてはほとんどみられなくなった。社会における、力と結びついた鎧も減じている。ただその一方で、男らしさを体現できないことの不安から、偽りの鎧を誇示する、また今ある鎧を手放そうとしない男性もいるだろう。残念ながら、伊藤が古くさいといった男らしさの鎧を、なんらかの形で着続け、いまだに脱ぎ捨てられていない男性も少なくないだろう。

地域、階層、エスニシティなどさまざまな社会学的カテゴリーが交錯する社会状況のなかで、形を変えながら、男性支配はさまざまな位相で継続している。既存の捉え方では、男性性のあり様を認識できなくなっている。筆者は男性性を研究する立場から、今後、男性をめぐる時代変化に敏感であり続け、男性性を理解する技術を鍛錬させていきたいと考えている。

注

1　本稿でも取り上げる細谷（2016）の研究では、覇権的男性性と訳され用いられている。

2　男性性をみつけ出す作業の一方で、バーガーとルックマンによる知識社会学にならって、男性性を分析する視点も探求されるべきであろう。研究者の側で、男性性をみつけようとするだけではなく、男らしさという言葉がどのように社会的に認識され用いられているのかといった視角から男性性を把握するのである。

3　サラリーマンを対象にした男性性研究は、凡庸で平凡な生活世界を生きているともいえるサラリーマンが、いかに戦後日本社会でさまざまな扶養制度を伴った制度的特権をもっていたかを明らかにしている。平凡で一般的だという社会的イメージによって覆い隠されている側面もあるが、サラリーマンが男性支配を実践、再生産しているということもヘゲモニックな男性性概念を用いることで詳らかにされている。

4　経済的成功が戦後日本の男性にとって大きな意味をもっていたことの証左ともいえる。

5　したがって、ヘゲモニックな男性性の枠組みで男性サラリーマンを検討する研究も、諸制度に根拠づけられた特権や優位性に集中しており、そのことは経済的な構造以外の根拠でヘゲモニックな男性性を分かりやすく抽出することが難しいことを示している。

6　ここで確認しなければならないのは、男性であること（being a man）と男性性（masculinities）は切り分けて理解する必要があることである。構築主義を経由した男性性理論は、コンネルを含めて男性と男性性の関係を本質的に解釈することを退け、社会的に構築されるものとしての男性性を浮き彫りにした。行為主体としての男性は、諸状況に応じて行為したい男性性を操作的に表出させジェンダーを実践する。男性であることで自然に男性性が付随するわけではない。男性という社会的存在と、男性個人の行為実践の間に流動するものとして男性性は存在している。男性性は、諸個人の行為における資源と規則であるとともに、諸行為において実践された男性性は、その個人や他者の次なる行為の資源と規則として再生産される。男性性は社会の側で生産されるものであり、個人が生得的に備えているものではない。したがって、変容させ瓦解させ、あるいは強化・補強することも可能であると考えられる。

7　男性性を学術的に追い求めることが、男性性を実践的な側面で定義づける営みに関連しているのかもしれないという再帰的視点をもつことが大切である。男性性の言説を生産しているという意味で、研究者も男性性を形成することに関与している。

8　近年、1980年代以降の男女共同参画政策によって教育や就労において形式的な平等が一定程度整ったため、そのようなセリフを筆者自身も耳にすることがある。実態としては、脱ジェンダー化された総合職／一般職の形式的区分に、前者には男性、後者には女性を振り分ける実質的差別が歴然として存在している。

9　第2節で提示したようにコンネルは、ヘゲモニックな男性性を中軸に男性支配社会のシステムを体系化しているが、同時にヘゲモニックな男性性をお膳立てする従属的な男性性や共謀的な男性性、従属的な女性性などもならんで概念化している。それにもかかわらず、筆者を含めて男性性研究は、支配者たる形態の男性性であるヘゲモニックな男性性にとくに関心を寄せており、この概念を基軸にして遂行されている研究が多い。ところで、従属的な男性性からみたジェンダー秩序や従属的な女性性からみた男性性の研究は、異なった男性支配の姿を明るみに出すことができるのではないだろうか。あるいは、共犯的な男性性が、ヘゲモニックな男性性から社会経済的な利益を得ようとする日常的実践を対象とする研究なども意義深いものとなるだろう。ただ、このような「弱者」の姿である男性性を規準として行われる研究は多くはない。

10　学術研究ではないが、杉田（2016）は、男性の弱さは、自らの弱さを認められない弱さだとして、男としての弱さを認めることを提唱する。

11　不安的な男性性の視角から暴力を考察する中村（2017）の研究を参照すると、不安や不全感、疎外感が男性の性暴力やDV加害の背景にあると理解できる。それにジェンダー非対称の親密的関係性という構造が加勢するのである。

参照文献

伊藤公雄
1993 『〈男らしさ〉のゆくえ――男性文化の文化社会学』新曜社。
1996 『男性学入門』作品社。

片瀬一男
2017 「非正規であることの男女差――従業上の地位とメンタルヘルス」『東北学院大学教養学部論集』176: 1-13。

片田孫朝日
2001 「〈書評論文〉男性性の批判的研究――コンネルの『覇権的男性性』概念の問題」『京都社会学年報』9: 271-277。
2014 『男子の権力』京都大学学術出版会。

川口遼
2008 「男性学における当事者主義の批判的検討」『Gender and Sexuality』3: 231-42。
2011 「男性性間の階層的関係とジェンダー秩序――ヘゲモニックな男性性概念の再検討」『女性学』19: 110-116。
2014 「R.W. コンネルの男性性理論の批判的検討――ジェンダー構造の多元性に配慮した男性性のヘゲモニー闘争の分析へ」『一橋社会科学』6: 65-78。

杉田俊介
2016 『非モテの品格――男にとって「弱さ」とは何か』集英社新書。

多賀太
2001 『男性のジェンダー形成――「男らしさ」の揺らぎのなかで』東洋館出版社。
2006 『男らしさの社会学――揺らぐ男のライフコース』世界思想社。
2016 『男子問題の時代？――錯綜するジェンダーと教育のポリティクス』学文社。

多賀太編

2011 『揺らぐサラリーマン生活――仕事と家庭のはざまで』ミネルヴァ書房。

田中俊之
2009 『男性学の新展開』青弓社。

知念渉
2013 「非行系青少年支援における『男性性』の活用――文化実践に埋め込まれたリテラシーに着目して」『部落解放研究』199: 41-52。
2017 「〈インキャラ〉とは何か――男性性をめぐるダイナミクス」『教育社会学研究』100: 101-120。

中河伸俊
1989 「男の鎧――男性性の社会学」渡辺恒夫編『男性学の挑戦――Yの挑戦？』pp. 3-30、新曜社。

中村正
2017 「不安的な男性性と暴力」『立命館産業社会論集』52(4): 1-17。

細谷実
2016 「『戦後日本の覇権的男性性としてのサラリーマン的男性性』説の考察」小林富久子・村田晶子・弓削尚子編『ジェンダー研究／教育の深化のために――早稲田からの発信』pp. 279-296、彩流社。

Connell, R.
1987 *Gender and power society, the Person and Sexual Politics*. Cambridge: Polity Press.
2005 [1995] *Masculinities* (2nd eds.). Berkeley: University of California Press.

Connell, R and Messerschmidt, J. W.
2005 Hegemonic Masculinity: Rethinking the Concept. *Gender & Society* 19(6): 829-859.

Hochschild, Arlie, Russel and Anne, Machung
1989 *The Second Shift: Working Parents and the Revolution at Home*. New York: Penguin Books.（＝1990 田中和子訳『セカンド・シフト 第二の勤務――アメリカ 共働き革命のいま』朝日新聞社。）

Kaufman, M.
1994 Men, Feminism, and Men's Contradictory Experiences of Power. In Brod, H. and Kaufman, M.(eds.) *Theorizing Masculinities*. Thousand Oaks: SAGE Pubilications.

Messerschmidt, J. W.
2014 *Crime as Structured Action: Doing Masculinities, Race, Class, Sexuality, and Crime*. Lanham: Rowman & Littlefield Publishers.
2016 *Masculinities in the Making: From the Local to the Global*. Lanham: Rowman & Littlefield.